

17 中根東里を佐野に招聘した医師・金束信甫(思順)とその医書について

松木 宣嘉

四国医療専門学校鍼灸マッサージ・鍼灸学科

佐野の植野村出身の金束信甫は、享保20(1735)年に陽明学者の中根東里を故郷へ招聘した功績によって、郷土史上に名だたる医師である。加えて東里が近年再顕彰されたことで、日本史上にもその名が知れわたるようになった。『佐野市史』によると、金束信甫は正徳2(1712)年生まれ、江戸の亀井坊に仮り住居して官医法眼玉池(多紀元孝)のもとで医学を修める傍ら、陽明学を学ぶために中根東里の門下に入る。植野村東光寺にある「東塾金先生の墓」には東里の弟子である松村延年の撰文により、諱を思順、字を桃野と号し、安永9(1780)年7月69歳のときに風証となり半身不随となり、天明8(1788)年1月20日77歳で没していることが書かれている。これらの情報から、金束信甫が数冊の医書を遺した金束思順と同一人物であることが判明した。

金束思順の医書は武田科学振興財団杏雨書屋大塚修琴堂文庫所蔵『候腹師説』(明和8(1771)年序)と『経治方』(明和7(1770)年序)、内藤記念くすり博物館大同薬室文庫所蔵『刺法要訣』(明和元(1764)年序)が知られている。『候腹師説』は腹診書として昭和期に山田国弼の『鍼灸沢田流』に翻刻掲載されているため、主に鍼灸関係者に知られている。本書の内容は内藤記念くすり博物館大同薬室文庫所蔵『先師百邪伝』(成年不詳)の前半に収載される「手足六経邪氣之篇」と大同小異である。さらに、長野仁氏所蔵の『傷寒金鏡録』(宝暦元(1751)年奥書)に合綴される「宮本春仙百邪伝」の内容から、思順は宮本春仙が先師であると思われる。宮本春仙は多紀元孝に医学を伝えたことは『経穴纂要』の序から明らかであった。信甫と思順が同一人物であることが確認でき、思順が多紀元孝から医学を学んでいたことが判明したことで、この腹診の内容は宮本春仙から学んだ多紀元孝が思順に伝えた内容である事が明らかになった。さらに、『刺法要訣』は佐野の医師である服部甫庵の旧蔵であったことが蔵書印から分かっていたが、思順が佐野の医師であれば同郷であることが旧蔵の理由のひとつであることも考えられる。

また、思順は『候腹師説』の「腹部與五腧爲對應論」において「三陰三陽ノ邪、腹部ニ見ルレバ、其ノ應必ズ五腧穴并榮氣經合ニ在リ。故ニ腹部ノ邪、足ノ陽明ナレバ、邪解谿ニ在、足ノ太陰ナレバ邪在ノ商丘...餘経倣レ之。夫レ各経五腧ヲ要トス。又有ニ要中至要之腧論原経ノ穴ナリニ詳ニ六経邪氣ノ圖解ニ見タリ。」と書いており、『経治方』にも「経治トハ内経ニ所謂盛ナル者瀉レ之、虚スル者補レ之、不盛不虚者、以レ経取レ之。皆専ラ刺法ヲ以言レ之也。湯薬モ亦タ経治アリ。」と書いている。これらのことから、思順が腹診においても湯液においても経絡経穴に重きを置いていたことが分かる。これは宮本春仙から続く経絡経穴学を得意とする学統に属していることを考えると納得のいく内容である。

今回の調査結果から、中根東里を佐野に招聘した医師・金束信甫と複数の医書を遺している医師・金束思順が同一人物であったことが判明した。これにより思順は多紀元孝のもとで医学を修めたことが分かり、宮本春仙から連なる学統であるとする説を補強する結果となった。医書の内容もこの学統の特徴を反映した経絡経穴を重視するものであった。

本研究は、2020年度「杏雨書屋研究助成」の助成を受けたものである。